
英雄に安寧の日々はない

ベゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄に安寧の日々はない

【Nコード】

N0158T

【作者名】

ベゼル

【あらすじ】

現代の地球に神の悪戯が起きた。2015年に「能力者^{シビル}」と呼ばれる異能者が現れたのである。そうして約100年が経過し、《能力者大戦^{グナログ}》と呼ばれる戦争が始まり、約7年前。戦争は終結した。そして今日。仲間と共に戦争を終わらせた英雄【天乃川悠介】は【天野悠斗】と名を変え、能力者の教育を専門とした神永学院高等学校に入学する。（題名を「天野悠斗の悠々たる日常」から変更しました。申しわけありません。）

全てが終わり、全てが始まる日。

荒野。

そうとしか言えない程荒んだ光景が少年の目に映る。

ある者は大剣を相手に突き刺し息を絶え、またある者は祈りを捧げるかのように佇んでいる所を後ろからサーベルを刺され、その生命を終えていた。

周囲を見回せる高台で座っている少年に、一人の少女が後ろから肩を置いた。

「全て…終わったな…。」

「ああ…。やっと…、全て…、…な。」

《能力者^{シビル}》。

それは世界の理を一つだけ捻じ曲げることが出来る異能者。

国家はその者たちを所有、研究した。

そうして能力者が出現して約100年が経っていた。

すると。

とある能力者が国家に失望し、世界を変えようと仲間呼びかけ、革命を起こそうとした。

最初は小規模の小競り合いだったが、徐々に戦火は広がり、ついには一つの大陸を焼け野原にしてしまった。

そしてついには全世界を巻き込んだ大戦となった。

ラグナロク
《能力者大戦》。

しかし。

2130年12月10日。

ラグナロクが始まって15年後。

そう例えられて過言ではない凄まじい大戦を、ある少年の手によってようやく幕を降ろされた。

あまのがわ ゆうすけ
天乃川悠介。

弱冠8歳にして世界で数少ない大国の軍と渡り合える^{絶対能力者}レベル10によって、悪夢は終わった。

生まれ持った天賦の才と濃密な体験、そして大戦の終結を共に願っていた仲間たち。

「早く戦争を終わらせたい。」

失ったモノは多かった。

しかし、戦争は終わった。

終わつたのだ。

悲しみと嬉しさが入り交じった気持ちを抱えている少年に、また手負いながら数人の女が背後に着地しました。

「…ユウスケ、これからどうするの？」

「そうだな…。」

「悠は誰よりも頑張った、だからこれからは私たちに任せて好きなことをして欲しい。」

「…俺、学校に行きたい。」

「学校？なぜなのカナ？」

「俺。まだ8歳だし…、それに…さ。」

悠介は血で滲んだ写真に写った少女を見た。

「責任…取りてえんだ。」

「…だが。それは貴様のせいではなからう？」

「分かつてる。…だけどよ、あいつに死ぬ前に頼まれたんだ。」

写真をそつと抱き、この写真の持ち主が消えていった海を見た。

「神奈^{かな}を幸せにしてくれ…ってさ。」

——— 今から7年後。物語が始まる。

その1 100年後の世界。

2137年3月下旬。

現代の航空機は1世紀前よりさらに速くなり、民間の航空機でさえ音速を超える速さで飛行する。他にもまだ要人にしか許されていないが、《シャトル便》というものが登場した。それはもちろん「バス・列車などの定期往復便」というものではなく、「スペースシャトル便」の略である。一度宇宙へ上がり、後に宇宙で取り付けられるロケットエンジンにより一気に目的地付近に移動し降下するといふものである。これにより、《東京・イギリス》間が僅か1時間で移動することができる。

そんなシャトル便に乗っている一人の青年の前には、蒼い地球と漆黒の宇宙が対比されている美しい情景が移っている。

『本シャトルは今から衛星軌道に乗り超音速移動を開始します。』
そうアナウンスが機内に流れ、機体が大きく揺れると、機体はたった今取り付けられたロケットエンジンにより徐々に加速し始めた。
「悠斗さん、どうかなされたんですか？」

カーゴパンツにラフなTシャツ、カーディガンという、1世紀前とさほど変化がない私服を着た青年は、黒髪のほとんどが白髪となり、「カッコイイ」というより「カワイイ」という印象を受ける顔のつくりを見える。だが、どこか厭世的な雰囲気醸し出している。そんな青年が浮いてしまう機内の内装、そしてスーツをしっかりと着た、息を呑むほど美しい金髪碧眼の女性が目の前に座っては気が萎縮してもおかしくないだろう。

しかしスーツの美女、シェリーは悠斗と顔なじみであるし、このような場所にこの青年はよく居たりするので、それはありえないと思った。もしかしたら先ほど自分が言った事に腑に落ちない部分があり、悩んでいるのかもしれない。そうなっでは大変だとシェリーは悠斗に声をかけた。

「…いやあ、あのさ。」

悠斗はゆつくりと口を開く。

「はい。」

「????昨日見たお笑いがモノすっげえ面白くなってさ。」

「…はっ?」

「結構楽しみにしてたんだけど、全然ツボに入らなくてさ…。今かなり不完全燃焼なんだよ…。」

「…はっ、はい。」

「くっそお、…テンション上がんね。」

「????あの、分かってます?今から巨大組織を一つ潰しに行くんですよ?」

「んなことあ分かってる。分かってるけど…、やる気出ないんだよなあ…。」

「……まああなたなら寝起きでも十分な仕事だと思いますが、私だつて同行するんです。しっかりしてくださいよ。」

「そうだよなあ…、?????よしっ、イイこと思いついた!」

悠斗がニヤツとしながらシェリーの方を見た。

その時シェリーは本能的に不味いと感じ、背筋が走った。

「……………何ですか?」

「一発芸して俺を笑わせろ。」

「……………はい?」

「だ・か・ら、一発芸して俺を笑わせろ。笑ったらテンション上がるからよ。さあさあ、イッてみよう!」

悠斗は楽しそうに拍手をする。

「いやっ…あのっ…そのっ…」

(もうテンション上がってるのに…、この人はなんてことを…。)
毎度毎度無茶ぶりするこのクソガキにシェリーは密かにイラつい

た。

「あれれ〜？【世界一の《能力者補佐》^{シビル アシスタント}】なんでしょ？一発芸くらい、出来るよね？」

そのとき。シェリーの中のスイッチが入った。

「……………いいでしょう！笑いすぎて死にたくなるものを見せてあげましょう！」

「よっ！！待ってました！！シェリー様あ！！！」

????そのシャトルの運転手は、数々の要人の運転を手がけてきた、その歴十数年になるベテランだったが、今までで初めての体験をした。

「もういい…もういいよっ！！もうっ！！！」

「いえいえいえ、何をおっしゃってるんですか。まだまだありますよ？」

「????????ハハハハハハっ！！もうやめろっ！！腹が…腹があー！！！」

「……………笑い声がウルサイ。」

その1 100年後の世界。(後書き)

《修正》 2011/6/11 「4月下旬」 ↓ 「3月下旬」

その2 行き過ぎた犯罪組織

中東・スカンジナビア半島西部。

一世紀ほど前。中東の国々は一時的にオイルマネーによって好景気となっていたが、先進国の相次ぐ太陽パネルによる発電に移行してから徐々に経済は後退した。未だに金でモノを言わせた設備もあるものの、さらなる宗教戦争によって行政を腐敗し、浮浪者や犯罪者が集まっていた。もちろん、未登録の能力者^{シビル}も言うまでもない。そして巨大な犯罪組織が多々できることは容易にわかるだろう。「相変わらずここは酷いな…」

「そうですね…」

誰の手が全くついていない夥しい人骨。それが当たり前である行き交う住民たち。少し路地に入れば衰弱死・餓死している人間を貪る野犬や野鳥。そんな光景が街中の中心地にある協会の近代的なオフィスから見える。

異常である。しかしこれが世界の一面なのである。

「お待たせしました。」

外を見た後で眩しい小綺麗なオフィスに、日本では普通に見える綺麗なスーツを着た男が秘書を連れて入ってきた。悠斗とシェリーはその男の指した席に座る。

「始めまして、担当の箕島といいます。彼は新田くんです。」

「よろしくお願いします。」

「派遣された天丘^{あまおか}だ。」

「シルビアです。」

悠斗とシェリーはいつものように偽名で応え、握手を交わす。そして四人はソファアに座る。

「今回こちらの要望を聞いていただきありがとうございます。」

箕島が言った。

「いえ、こちらとしても事態を早急に治めたいので。調査は進ん

でおりますか？」シェリーが悠斗の代わりに話を進める。

「はい。新田くん。」

新田はバックからデータチップを取り出し、シェリーに渡した。シェリーはすぐにポケットからデバイスを取り出し差し込む。すると空中にパネルが現れ、保存されていたデータが表示された。

「……事態はあまり芳しくありませんね。」

「はい、なので逸早く収拾していただきたいのですが……。」

「……シルビア、そんなにヤバいのか？」悠斗は何気なく言った。

そのとき空気が止まった。

「……天丘さん、先ほど説明しましたよね？」シェリーのこめかみには血管を浮き出していた。

「聞いてなかった。」

「ちよつ、ちよつと本当に大丈夫なんですか？こちらは本気なんですよ？」

「能力者^{シビル}としては申し分ないんですが、性格が些か問題あるだけなので大丈夫です。箕島さん。？？？もう一度説明しますので、しっかりと聞いておいてくださいね。場合によっては、あなたには本気になつてもらわないといけませんから。」

シェリーはデバイスに入っている資料を大型空間パネルに写した。

「天丘さん。あなたは《RSD - 220》というものを知ってますか？」

「《RSD - 220》？なんだそれ。」

「ならば《ツァーリ・ボンバ》は？」

「……確か《ソ連が造った水爆^{シビル・ウエボン}》じゃなかったか？」

「ええ。軍事開発がほぼ能力者専用か対能力者になり、大量破壊兵器の開発が止まっている今、おそらく世界最強の爆弾です。」

パネルには開発当時の《ツァーリ・ボンバ》、寸胴な鉄の物体が写る。

「世界最強…ねえ？」

リトルボーイ

「その威力は広島型原子爆弾の3300倍。または第二次世界大戦中に全世界で使われた総爆薬量の10倍といわれる、この50メガトン級核爆弾の核爆発は1、000キロメートル離れた場所からも確認でき、その衝撃波は地球を3周したと言われております。」

「ほお…、まさか。それを持つてる組織があるって言うんじゃないだろうな？」

「そのまさかです。」

悠斗の目の色が変わったのを確認すると、シェリーは次の映像データを写す。

「これがその《ツァーリ・ボンバ》の写真。これは特務能力者^{エージェント}からの情報です。」

この地域にあるとは思えないほどの最新鋭の設備が整っている研究室で、悠斗が知っている《ツァーリ・ボンバ》とは半分以下の大きさの爆弾が写っていた。

「…確かなんだな？」

「おそらく。もちろん偽物である可能性もありますが、もし万が一本物であれば、あなたではないと対処しきれません。…お願い、できますか？」

「????やるしかねえんだろ?ならやるよ。」

「ありがとうございます!いやあ、一時はどうなるかと思いましたがよかったです。」

箕島が急に声をあげ、しゃべりだした。

「しかし、本当に対処できるのですか?あの《ツァーリ・ボンバ》ですよ?」

「出来る方を我々、《協会本部》が連れてきたんです。あなたが心配することはありません。」シェリーは冷たく突き放す。

「…そうですね。しかし申しわけありませんが、せめて能力だけでもお教え願えませんか?どうしても不安なのです。」

それでも引き下らない箕島にシェリーは態とらしいため息を置

き、声を大きくして答える。

「ですから???。」

「???シルビア、いいよ。」悠斗が半笑いで止める。

「本当ですか!?!」箕島は嬉しそうに答える。

「ああ。」

「天丘さん?!?。」

「どうどうシルビア。???だけど、『能力名』は言えないんだよ。それは分かってくれ。」はっ、はい。」

「ちよつと!!私を無視しないでください!!。」

すると悠斗はポケットから小さなボタンが付いた筒状のモノを取り出す。そうしてボタンを押すと、壁に小さな赤い点が現れる。

「レーザー! ポインター?。」

新田の声に頷き、角にある観葉植物にレーザーポインターを横切らせると、ジュツという物が焼ける音がし、観葉植物は真ん中から上が床に切り落とされる。

「「おおっ!!!」」

「...んまあ、こんなところだ。シルビア、場所は分かってるんだろ?」悠斗はレーザーポインターをポケットにしまう。

「???全く、あなたという人は...はい。分かってますよ。」

「なら今から行くぞ。」箕島と新田は驚き、思わず声を荒げる。シェリーは分かっていたかのようにまたため息を吐く。

「何も今からじゃなくとも...」

「悪いね。こう見えて忙しいんだよ。俺は。」

そうして悠斗は二人の声も聞かず、部屋から出る。シェリーも二人に黙礼し、慌てて付いてくる。

「場所は?。」

「ここから北へ120キロほど行った岩場です。」

「ならすぐ着くな。」

悠斗は鼻歌交じりにオフィスを進んでいく。

「...なぜあんなことを?。」

「あんなこと？」

「能力を見せつけることですよ。」

「……？？？本当に分かってないなら、お前はまだまだ未熟だな。」

「……はっ？」

悠斗はポケットからレーザーポインターを取り出し、くるくると指で回す。それはあたかも近くのスーパーへ買い物に行くために車のキーを回している姿にも見えた。

「……？？？数分後。」

悠斗とシェリーは反重力仕様の車両で移動し、目的地近くに来ると乗り捨て、双眼鏡で岩場を目視できるところまでやってきた。シェリーが双眼鏡でデータを収集・調査している間、悠斗は砂除けのマントをパタパタと扇ぎながら、つまらなそうに空を仰ぐ。

「…………。」

悠斗は砂を掴み、握り締め、投げ飛ばす。

「シェリー。どこまで終わった？」

悠斗と同様に砂漠仕様実戦服のシェリーは、双眼鏡を覗きながら片手でデバイスを叩いている。

「……？？？必要事項の調査は終わりました。……今回はなかなか大きい組織のようです。」

「へえ、どのくらい？」

シェリーは手の平の大きさのデバイスを操作し、要約した資料を悠斗の前に表示させる。

「《非能力者^{フォロー}》が200人。《能力者^{シビル}》が13人。所有武器は……」

「……つと、これどつかの特殊部隊かよ？」

「そうですね。やはり今回も奇襲するべきですね。」

「だな……。……んじゃ、イチチョやるか。」

「お願いします。」

シェリーが高性能仕様小型装置を《アンチ・ベイズ》仕様を施したバックに入れたのを確認すると、悠斗はシェリーの腕を掴み《能力》を発動した。

二人は重力を無視し、ゆっくりと上昇を始め、宙に数メートル浮いたところで静止する。

「????さてと、のんびりやりますか。…ふあ。」

生あくびを置き去り、悠斗とシェリーは一気に敵アジトへと直進した。

その3 突入戦

高速で飛行する悠斗に、敵組織は予想以上より早く対応を始めた。コンドルは岩場の洞穴をアジトとしており、その洞穴の入り口に複数のミサイルが顔を出した。そして出てきたのと同時に、悠斗に向かって発射された。

（やっぱり反応が早いな。）

「悠斗さん！！」

「分かってるって。」

現代の軍事兵器は能力者の出現により、能力者の能力使用を阻害するために紫紺石ラクナチウムが含まれることは、ほぼ当たり前となっている。

まあ、悠斗には全く関係ないことだが。

「あらよつと。」

悠斗は何気なく手を振ると、目の前にソフトボールくらいの大きさの光弾が複数現れ、ミサイルを撃ち抜いた。高熱の光弾により推進剤は派手に誘爆していった。

「——全弾命中を確認！」

「ハイハイ。」

（全弾が完璧に撃ち抜いたことを自分でも分かってたけどな。）

まあアシスタントの性か。…ん？

入り口付近の地面が急に隆起すると、そこには大型機関銃が現れ連なっていく。そして悠斗に向かって発射された。

「おっとつと。」

悠斗は片手で持つシェリーを胸に抱えなして、可能被弾面積を減らし、回避運動を始める。直進しながら弾幕が薄いところをくぐり抜けていき、位置を確認する。そして光弾は放ち機関銃を破壊していく。

「突っ込むよ。」

「はい!!」

最新型の様々な監視カメラの映像がパネルに映し出される司令室に、一人の男が白い歯を見せていた。その男とは別に真剣に分析を行なっている青年は、キーボードの前にいた。

「これが協会シビルの能力者か…、予想以上じゃないか。」

「はい。外の防衛線が安々と破りましたし、第1部隊がたった4秒でやられましたね。」

「ああ…、今まで何回か協会のが来たが。全員突入してあの世に逝ったからな。今回はさすがに本腰を入れてくれたか。」

「ええ、もしかすればかなりの高レベル能力者かもしれませんね。…トロフィム様以上の。」

「コンドラト、言うようになったな。」

「いえ、私はただ分析しているだけですから。」

「そうだったな、確か今回の能力者の能力名は【光】だったか？」

「はい。」

「目標の予想レベルは？」

「おそらく《レベル5》から《レベル6》かと。」

「そうか…、場合によっては私も出る。準備しておいてくれ。」

「はい。」

そうトラフィムはいうと司令室を出て行った。

「——トラフィム、あなたは小物ですね。」

コンドラトはそう言つと、キーボードを叩き始めた。

「死ねえ!!」

「断る。」

そう言った荒くれ者の兵士たちマシンガンで悠斗を殺そうとしていたが、悠斗は凄まじい弾幕に造作もなく大きく横に飛びながら光弾を放ち、次々と兵士たちのマシンガンを壊していく。

「——クソっ!!」

「——構うな!! やってしまえ!!」

今度は自爆しようと飛び掛ってくる兵士たちだが。

「あらよつと」

一番前の兵士の顎を蹴りで打ち抜き、

「ほいさつと」

次の兵士を空中で回転しながら顔の右側を殴り、

「ほほいの…ホイ！」

そして最後の兵士を蹴り飛ばし、後ろにいた兵士ごと壁に叩きつけた。

悠斗は高レベル能力者の特有の追加能力【飛行】による変速性の高い独特の体術により、まるで舞うかのように4人を自爆させる前に気絶させた。

「シェリー、まだ？」

「後もう少し待ってください！」

現在内部回線に繋ぎ、ファイヤーウォールを次々と潜りぬけ、急いで内部の見取り図を取っていた。

「早くしろよ、キューピー三分クッキングだってもっと早いぜ？」

「あれは仕込みしてます！」

「それもそうか。——っ!？」

悠斗は淡い光を放つ壁を展開すると、何かが当たり大爆発し、衝撃が二人に来る。そのまま断続的な能力者の砲撃が始まった。

「――敵の能力者ですか！？」

「だな、後どのくらいだ？」

「――今終わりました！」

「上出来――！」

シェリーはデバイスをしまい、戦闘用の前身を覆うコートから銃を取り出し構えた。

「――右にある通路を進み、二つ目の角を左に、そのまま真っ直ぐ行つた突き当たりの部屋です――！」

「あいよ、先に行つてな。俺はこいつらやってから行くからよ。」

「はい、よろしくお願いします――！」

悠斗が光弾を出し、シェリーは対能力者用の手榴弾カウンターメジャー
グレネードを取り出した。

「――敵は3・5・8・9に、8人います――！扉が閉鎖されていますので、お願いします。」

シェリーは瞬時に計測した敵能力者の位置をコードで悠斗に伝えた。

「オケ。カウント行くぞ、3・2・1――。」シェリーは体を低くした。

「――0つ――！」

悠斗は右上、正面、正面下、右下、そして右にある鋼鉄の扉に向かって光弾を放つ。それと同時にシェリーの扉へと向かう動きに合わせて、光の壁を展開した。

複数の光弾が着弾し、爆風が室内に立ち込める。

「気をつけな。」「はい!!」

扉に飛び込むとシェリーは手榴弾グレネードを投げ、能力者・兵士諸とも葬る。悠斗はそれを見ると、扉の真ん中に立塞がる。

「…さてと。」

悠斗は対峙している数人の能力者に声をかけた。そのうちの隊長らしい一人の男は髭面で厳つい顔をし、悠斗を睨んだ。

「4人いけたか…。」

悠斗は横目で倒れている能力者を数える。

「お前が協会の能力者か…、協会のやつにしてはなかなか強いみたいだな。」

「それはどうも。——1人行っちゃったが、いいのか？」

「ふん。無能力者の分際で何ができる？所詮、能力者補佐が。」
シビルアシスタント

そんな能力者の言葉に悠斗は思わず吹き出してしまった。

「何がおかしい!？」

(まあ、普通の能力者補佐^{シビルアシスタント}は戦闘力を持ってないけどよ…。)

「——あゝオモしれ、いやあさ。そんな能力者がいたんだよ。そしたらよ…。」

悠斗は満面の笑みを返した。

「その能力者、ボコられたんだよ。」

その4 弱者の力

ゴーグルを付けたシェリーは、小さく肩で息をしながら跳ねるように通路を進んでいく。

「ハア…ハア…」

（——左の通路から3人、右の通路から4人。…なら！）

腰のグレネードを3つ取り、ショルダーバックから拳銃を取り出す。

（接近まで…、——3…、2…、1…。——今！！）

シェリーは常識では有り得ない跳躍をし、右の壁を蹴る。右の通路にはグレネードを。目的の扉へと続く左の通路へ飛び込むと、そこには4人の男が立っていた。シェリーはマントで銃と体を隠し、小さく構えた。

そのうちの如何にも柄が悪そうな男が嬉しそうに口笛を吹く。

（——全員レベル4…、まあこのような所ではそうしようね。）

ゴーグルに表示されるベイズの放出量から算出すると、そうなる。

ならば相手にしても倒すことは難しくないだろう。

「うつほ、上玉じゃねえですかい！」

「ああ。」

「いやあ、久々に楽しめるぜ。この前買ってきた無能力者も壊れたからなあ…。」
フォロワー

「そうだな、今夜は宴だな！」

通路にゲラゲラと不愉快な笑いが響く。

（…また、そのことですか。）

シェリーは遠慮無く不快感を顔に示した。

今までに何回もこのような唾棄すべき男と出会ったことがあり、その度に自分の体を上から下まで舐め回されるような目付きで見られる。その度に自分を拭い捨てたくなるような不快な気持ちになるのはどうしても慣れない。もちろん慣れるつもりはないが、人からチャホヤされやすいこの容姿に生まれたことにやはり悔やんでしま

う。

（だから男というものは…、いや。そういえば一人いましたね。）

シェリーはある青年の顔を思い出すと、洗い流すようなため息と共に小さな笑みを浮かべた。

（私に色仕掛けをさせたのに、まるで効果がありませんでした。）

先ほど別れた相方は常に自分を一人の人間として扱う。一応美人のプライドとして何回も色仕掛けをしたが、いつもスルーされてしまう。一度男色家かと思ったが、あれの姉曰くしっかりと女性に対して興味を持っているそうだ。

コンビを組んで何年も経つが未だに「掴ませ」ない、不思議な青年。

（ふう…、なんだか考えてるのが馬鹿らしくなってきました。）

勝手に盛り上がっている能力者たちと対峙していることを思い出
し、相手が傭兵と云えども能力者であると自分に忠告する。

「…《国際能力者協定：第16条》において、あなた方の心身を
保証します。速やかに投降してください。」

凜として言ったシェリーに、男たちは大笑いした。

「おい聞いたか！？無能力者が投降しろってよ！？」
フオロワー

「ギヤアアツハツハツハツ！！」

「ヤバイな…、いいね気が強い女は嫌いじゃないぜ。」

「うわあゝカッコイイ！」

井の中の蛙たちはそう騒ぐ。

「再度通告します。《国際能力者協定：第16条》において、あ
なた方の心身を保証します。速やかに投降してください。」

さらに男たちは笑う。4人のうち1人は笑い転げていた。

「…では、あなた方を捕縛します。」

そのとき。

シェリーの姿は消え、男たちの背後に現れた。

「——なっ！?!?!?!」

1人は突如出現したシェリーに何とか反応したが、シェリーにと

つては嘲笑するほどの遅さだった。

シェリーはまずその能力者の首もとを掴みグローブの装置によって高圧電流を流し、気絶させる。その次にその能力者を蹴り飛ばし、別の能力者にぶつける。

「きつ、
貴様あ！！」

叫ぶ男の手に焔を舞わせ、何やらを収束している慌てふためく男は、2人はシェリーに放とうとする。

(遅い。)

脇下に構えていた拳銃から麻酔弾を露出している肌に放った。

「……このクソ無能力者があー！！」

氣絶した仲間ごと蹴り飛ばした能力者は、仲間を乱暴に退かすと、
【加速】させたライフル弾を数十発飛ばす。だが、その男の思惑通りにシェリーはならなかった。

「消えた!？」

すると又もやシェリーは姿を消した。

「ガガアアアアアアアつ!!!!!!」

男の背後に【移動】したシェリーはスタンググローブで気絶させる。

「……無能力者は確かに《弱者》です。しかし、《無力》ではあり

ません。」

と諭すかのように能力者^{シビル}に言った。

（さて、急ぎましょうか。）

シェリーは目的の扉がある方へと移動を始めた。

その4 弱者の力（後書き）

早く終わらせねば…、だけど全然予定がない…。orz
用語や設定の説明は全て第1話でやります。

その5 クアंटラム・フォール

数回の戦闘を潜りぬけ、数分通路を駆け抜けると、そこには如何にも重厚な扉がシェリーの前に立ちはだかる。再度地図を照合し、ここが目的の扉だと確認した。

（悠斗さんを待つ…いえ、ここは先に行きましょう。）

そう判断したシェリーはフードを深く被り、腕にある装置を稼働させた。すると光学迷彩により、シェリーの姿は周囲と同調した。迷彩が上手く動いていることを確認したシェリーはすぐにケーブルを挿し、パスワードを解除に乗り出した。

（形式は…《リシラスター式》ですか。ならば面倒ですが、以前創ったこれを使えば…。）

空中のパネルを操作しツールを使って15桁のパスワードを解除させると、すぐに画面には「Clear!」の文字が踊った。

シェリーは思わず笑みを零したが、ゆっくりと左右に開かれる扉を見ると体を念のため壁に隠し、コートのしたからサブマシンガンを取り出す。そして扉が完全に開かれると、小型探査装置を研究室に放り込む。

（——人はいない…。しかも監視カメラがない？…怪しいですが、今は。）

安全を確認したシェリーは部屋に飛び込み、研究室を見回す。

（非合法組織にしてはやけに新しい設備が揃っている…、まあ《ツァーリ・ボンバ》を研究するのなら当たり前でしょうが…。）

部屋の中央には直径1メートルほどのバトミントンの羽のような形をした鈍く光る物体があった。

（これが《ツアーリ・ボンバ》…。しかし…、やけに視界がブレる…。これは一体…？）

シェリーは気力を取り戻そうと小さく顔を振るうが、視界はさらに悪くなり、気分が悪くなってくる。

「しまったっ…これは…スキル…？」

「気づくのが遅いぞ、小娘。」

出入口に頬に十文字の傷が入った男が立っていた。いかにも歴戦の雰囲気醸し出すその男はふんぞり返っており、ため息混じりにこちらを見つめていた。

「あなたは…」

シェリーは体に鞭を打ち、サブマシンガンを構える。

「あの小僧の能力者補佐だから少しはやると思ったが…、拍子抜けだ。」男、トロフィムは体を壁に預けた。

（この男は…、今までの奴と格が違う…！）

躊躇いもなく引き金を引き、無数の弾丸をトラフィムに放つ。

「しかしその判断は評価しよう。」

（消えた！？こちらも…応戦しなければ…。）

シェリーの応戦しようとする気概も虚しく、意識は徐々に遠のいていき、その場に崩れた。

「それに、うちの兵士を無傷で戦闘不能にするその心意気。貴様を一人の戦士として扱おう。」

トラフィムはゆっくりとシェリーに近づき、手錠を懐から取り出す。

「ならよ、おっさん。うちの可愛いアシに手を出さないでくれるか?。」

顔に煤が付いた悠斗は悠々と研究室に入ってくる。

「…早かったな、小僧。」

(全く気配がなかった…。)

「まあな、ったくお宅の兵士やけに練度高かったよ。2分も時間使っちゃった。」

悠斗はまるで旧友に話しかけるかのように優しく口を開く。

「…なぜ、奇襲しなかった?。」

「あら?して欲しかった?。」

「はぐらかすな。」

「うちの相方に優しくしてくれたから。」

「…能力者シビルの癖に無能力者フォロワーの肩を持つとは、貴様は《共存主義者》か。温室育ちにしてはなかなかの腕を持っているな。」

「温室育ちねえ…。」

先に動いたのはトラフィムだった。

予備動作なく突如飛んだトラフィムは手から透明の無数の刃を悠斗に放つ。

（《ツァーリ・ボンバ》はあそこか、なら…。）

悠斗は直ぐ様反応し手の振り、角度から推測したあるであろう見えにくい刃をぐぐり抜けていく。

（何っ！？）

そしてトラフィムまで5メートルという場所にまで近づくと、今度は悠斗が2発光弾放つ。

（速いっ！！）

トラフィムは横へ飛びながら刃を放ち撃ち落とす。そして牽制のために悠斗にも放つが…。

（いないっ！？）

背後に高熱の物体を感じるので奇襲を食らったかと思い、上へ飛ぶ。

「いらっしやい。」——「なっ！？」

天井には悠斗が待ち構えていた。悠斗は止めと言わんばかりにすでに発生させていた無数の光弾を一気にトラフィムに放つ。トラフィムは一瞬戦慄を感じたがすぐに冷静な対応を始めた。周囲の空気を一瞬収束させ、開放させる。そして衝撃波を発生させ、光弾を全

て撃ち落とす。

「うおおっ!!」

感嘆の声を挙げた悠斗は衝撃波を避けるために一旦下がり、悠斗とトラフィムは空中で対峙する。

「…すげえなあ、久々にこんなに練度が高い技を見たよ。もしかして【精鋭】か？」

「ああ、最終戦には参加していなかったが。」

「へえ、どう？協会に入らない？給料いいよ？」

「ふん、貴様らのような犬にはならん。」

（こいつは間違いなく強い…、仕方ない。アレの力を借りるか。）

そう決断するとトラフィムは懷から注射器のような長細い先端に針らしきものが付いたモノを取り出し、迷いなく自分の腕に刺し、中の液体を注入する。

「っおい！？今お前何を注入した!？」

「——貴様は強い…、だからこいつの力を借りるまでだ!!」

するとトラフィムの周囲に本来見えないはずであるベイズが、極小ではまるで星の瞬きのように朱色に光る。

「《クォンタム・フォール量子可視化》…。」

「ハハ…、ハアハハハハハハっ!!私は遂に^{神の領域}レベル7に突入したのだ!!」

（マズイな…レベル7の相手は今の俺には不可能だ…。）

「安心しろ…、まず貴様を気絶させ私の傀儡にしよう。」

——楽しかったぞ!!小僧!!」

次の瞬間トラフィムの姿が消えると悠斗の前に現れ、圧縮された空気を放ち、悠斗を鋼鉄の壁に叩きつけ、地面に落ちた。さらに感覚が鋭敏化しているトラフィムは悠斗が気絶したことを確認した。

「ふん…、いくら協会の精鋭であろうと今の私には勝てんのだあ
っ！！」

トラフィムは先程の冷静さを失い、狂ったかのように笑い始める。
しかし、それを嘲笑うかのように事態は変化した。

「これは…《量子可視化》クァンタム・フォールっ！？！？！？！？」

部屋中に銀色のベイズがハンドボール程の大きさで瞬き始めたのだ。

「——うおお…クソいてえ…。」

すると気絶したはずの悠斗が起き上がる。

「きつ、貴様あ！！まさかこれはお前の《量子可視化》クァンタム・フォールかつ！？
！？！？」

「ああ。実は俺リミッター着けててな、気絶するかバイタルが低下しないと外れない仕組みになってんだ。これが…全く妙な設定にしてくれたもんだよ。」

悠斗は見せつけるかのように片手首に着けていた群青の腕輪を出す。リミッターである腕輪は粉々に砕けていた。

「この規模はレベル8…貴様、まさか【閃光】かつ!?!?」
「いんや違うよ、【閃光^{あいつ}】は女だろ?」

圧倒的な格の違いを見せられたトラフィムは動揺していた。

「きよつ、協会が秘匿能力者^{ブラックシビル}を持っているとはどういっつもりだつ!?!?!?」

「お前にとやかく言われる筋合いはねえし。」

「なつ!?!? 貴様の能力は一体なんだ!?!?」

「おいおい、そもそも教えるつもりはねえよ。お前バカか?」

悠斗にバカにされ完全にトラフィムは頭に血が回った。

「ぐう…、レベル8だからといって私をバカにするのかつ!?!?」

明らかに理性を欠けた言動に悠斗は眉を潜めた。

(…こいつはタチの悪い増強剤^{ブースター}をドーピングしたな、質の悪いやつだつてこうならないぜ。早くワクチン打たないとマズイぞ。)

「知るか、悪いがさつさと終わらせてもらう。」

「私を…バカにするなああああああああああ!!!!!!」
「!!!!!!」

二人の姿消え衝撃波が次々起きるが、二人の姿はすぐに現れた。
今度は無傷の悠斗が満身創痍のトラフィムを壁に叩きつけ、能力を使つて動きを止める。

「何をするつ!?!?」

「ちつたあ頭冷やせつ!?!バカヤロウ!?!」

悠斗は片手に持つ注射器をトラフィムの喉に刺した。トラフィムはその薬に含まれた催眠成分よって深い眠りに落ち、悠斗はホッと一息つける。

「シェリー、もういいぞ。」

「はい。——しかし、あなたという人は……。」

地面に倒れているシェリーの映像は消え、部屋の外からシェリーが入ってきた。

「ん？なんだよ。」

「……ほら、あなたの《量子可視化》クワンタム・フォールでめちゃくちゃですよ。ここ
の機器は。」

「……えっ？マジ？」

トラフィムを地面に寝かし、シェリーが操作しようとしている画面を見るが未だに沈黙したままだった。

「まあ《ツァーリ・ボンバ》を処理するくらいでしたら私が持つ機器で十分ですが、繋がりを持つ組織を探れませんか。これではどうするつもりですか？悠斗さん。」

「でもよ、《量子可視化》クワンタム・フォールでパアになるか？最新式のやつが。」

「うちの機器はしっかりと対策しているから大丈夫なんです。もういいですよ。」

不貞腐れるシェリーは被せているアンチベイズ仕様のマントをどかし、目的の《ツァーリ・ボンバ》を固定している機械に無力化しようとしてアクセスを始める。

「悪かったってシェリー、でも目星付いてるからよ。」

「…本当ですか？」

「ああ、多分——」

次の瞬間。《ツァーリ・ボンバ》は爆発した。

その5 クアंटム・フォール（後書き）

次でようやく第0話が終わります…。

その6 シェリー・ディア・カリス

「作戦は成功しました。《R663K》により、あの能力者^{シビル}とアシスタント、コンドルのアジトを全て葬りました。」

正装したコンドラトは先ほどまで悠斗がいた別の協会支部の応接室にいた。作戦の経緯^{シビル}を知らせるデータチップを新田に渡す。

「ご苦労。協会の能力者^{シビル}はやっぱり強いのか？」

先ほどの腰の低い態度と打って変わって、葉巻を悪趣味に加えている箕島は横柄に言った。

「はい。うちの防衛部隊が数分でやられました。」

「そうか。…ちなみに《R663K》は完成したか？」

「ええ、あなたの援助もあって数日前に。あなたのご注文通り、シミュレーションでは領域を設定できるはずです。これ以上にテロに向いた兵器はないでしょう。」

「ほあ…、他の完成品はどこにある？」

「ここに。計210発を建造しておきました。」

さらにコンドラトはデータチップを新田に渡す。渡された新田はすぐにデータを開き、中身を確認した。そこにはコンドラトが予め運び出していた他の最新式の兵器のデータも入っていた。新田は確認したことを箕島に知らせる。

「うん。なかなか素晴らしい働きをしてくれた。」

「ありがとうございます。お約束通り、今後も支援していただけますね？」

「…いや、すまないが変更だ。」

箕島の言葉にコンドラトは眉を寄せる。

「——君はここで退場だ。」

「なっ!?!?!?」

新田は懷から銃を取り出し、コンドラトの脳天を撃ちぬいた。そして返り血で自分たちの服が汚れないよう不透明の障壁が展開され、

飛び散った血がカーテンを作る。

「しっかりと処理してくれ。」

「はっ、すぐに処理班が来る手はずになっています。」

「そうか…。」

箕島は血の匂いで充満した応接室を出、自分の部屋支部長室に入り、椅子に自分の体を預けた。

「それにしても…ようやくここまで来たのだな。」

「はい。もうすぐあの忌々しい協会を潰すことが出来ます。」

「ああ…、我々《連合》が負けてすでに7年…。国際的にも政治的にも我々は徐々に弱体化していくだろう。しかし、天乃川悠介に破れ散っていったアイザック様の本懐を叶えるために苦渋を飲み続けた甲斐が…今報われる。」

「はい…。」

「やつぱり、協会内部にも敵がいたわけだ。」

支部長室中に銀色のエネルギーベイズ量子の結晶体が現れる。

「これは…、《量子可視化》！？」
クァンタム・フォール

「——まさか…！」

「協会を舐めて貰っちゃあ困るな。」

部屋の扉が派手に破壊され武装集団が部屋に入り、箕島と新田に銃を向ける。

「貴様…生きていたのか…。」

「ああ、逆に爆発が弱すぎてビックリしたよ。」

銀色のベイズを纏っている悠斗は悠々と部屋に入ってくる。

「…データでは、大量の紫紺石ラクナチウムが含まれていたはず。なのに何故能力を使用できたのですか？」

「俺は特異体質だね。そういう奴には一応影響は受けるんだけど、

気合入れたら関係ないんだよね。どうしてかは知らないけど。」

「アンチキャンセラー 対対能力者兵器：銀色の《クアンタム・フォール 量子可視化》…、まさかあなたは【カイト】！？」

「あり？くじょう 紅條のやつ、ちゃんと情報統制してんのかな。…まつ、いつか。」

悠斗は緊張感なくポリポリと頭を掻く。

「にっ、新田くん…【カイト】とは何だ？」

「任務成功率100%、戦後数々の騒乱や組織を鎮圧・駆逐してきた高レベル能力者です…。アンチキャンセラー 対対能力者兵器を持ち、しかも抽象系の能力を持つ能力者…。」

「そっ、そんな【精鋭】ラグナロクで聞いたことがないぞ…！」

「ふう〜ん、幹部クラスだったみたいだな。こりゃイイもん釣り上げたよ。——んじゃ、後のことよろしくねえ〜。」

悠斗は予め協会から呼んだ制圧部隊の隊長の肩を叩き、部屋を出て行く。

「悠斗さん。」

「おっ、シェリー。データは取れたか？」

「はい。」

外で待っていたシェリーは悠斗の横に侍り、一緒に外へと向かう。
「どこまでいけたか？」

「研究に關与していた組織、支援していた人物、そして…こんな方まで。」

シェリーは結果を悠斗の前にパネルで表示した。

「…こいつ生きていたのか？」

「通話記録をサルベージしました。」

（…えっ？）

一瞬だけ。ほんの一瞬だけ。

「…そうか、あいつが…か。」

悠斗は今までに見たこともない息をこらした顔をしていた。
触れば自分が消されるかもしれないほど、重い顔を。

「…まだ天乃川^俺悠介は死に切れないか。」

何を言ったか聞こえず、声を掛けようとしたが飲み込んだ。

「…よし。シェリー帰るぞ。」

「はっ、はいっ！！…って何かありましたっけ？」

「爆笑オンエアバトル^{オンバト}があんだよ！！」

その言葉を言ったとき、悠斗はいつものお道化た顔に戻った。

「——って録画すればいいじゃないですか！！」

「バカヤロウ！！あれはリアルタイムで見るからこそいいんだよ

！！」

駆け出した悠斗にシェリーは慌てて追いかける。

（私は…あなたが何者か知りません。ですが…。）

どこかコドモっぽく、どこかオトナっぽい。

（私、シェリー・ディア・カリスはあなたの背中を追い続けます。

）

二人は対応に追われる隊員の間を通り抜き、支部の出入口から光の中へ飛びだした。

unknown

箕島はやられたか。

はい。しかし何とか《R663K》は回収しました。

そうか。

はい。…ですが【カイト】とは知り合いなのですか？

ん？

…いえ、先ほどこの単語に反応していたように見えたので。

そう見えたか…。——まあ知り合いと言えば知り合いだな。

そうなのですか？

ああ…、この傷はあいつから受けたプレゼントさ。

…よほど強い方なのですね。

だからお返しをしなくてはな。

お返し…ですか？

ああ。今度はあいつにプレゼントだ。…絶望をな。

その1 7年後の世界。

「んあつ……」

目を覚ました私はまず捻れて体に巻き付いているパジャマと布団を外す。1世紀前より合成繊維が増えてきているけども、私はやっぱり天然素材の自然な柔らかさが好きです。そして毎朝の習慣であるカーテンを開く。

（うん、今日もイイ天気だ。）

始めまして、私は天野奏子あまの かなこと言います。能力者の教育を専門にしている神永学院高等学校に通う、新高校2年生です。後、生徒会副会長をやっています。

「……さつ、今日も一日頑張ろう！」

私は急々（いそいそ）と学校へ行く準備を始める。

約100年前。能力者シビルという存在が現れました。その後1世紀近く経ったとき、とある能力者シビルによる紛争によって大きな戦争が起きて、そして7年前その戦争が終わりました。私の弟の悠斗は出ましたが、前線に出れない私は保護されたまま最終戦を迎えました。「15年戦争」とか【能力者大戦】とか【ラグナロク】とか様々な言葉で言われるその戦争は私はよく知りません。悠斗が言うには、今自分が生きていることがオカシイくらい激しかったそうです。7年前。ベイズを消費仕切っていた悠斗を見たときは涙が出ました。参加した中で生き残っている能力者シビルがほんの一握りしかいなかった最終戦で、唯一の血の繋がった存在も死んだかと思いました……。ですがあの《ベイズ》を消費仕切っていましたけど、必死に笑顔を見せている悠斗を見て、いつの間にか私も泣きながら笑ってしまいました。

ちなみに《能力者シビル》とは『エネルギー量子を操作干渉することによって超常的非科学的な現象を起こすことが出来る人』のことを、《ベイズ》とは『能力者シビルがエネルギー量子を操作干渉する上で脳か

ら出ている脳波動』のことを言います。たまにエネルギー量子のことを《ベイズ》と言いますが、あれは実は間違えなんです。

「奏子ちゃんあゝんっ！！ご飯できたよっ！！」

「はあゝいつ！！」

制服に着替えた私は急いで階段を駆け下り、リビングに入ると、台所には見知ったとても美しい女性が可愛らしいエプロンを着けて朝御飯を作ってくれてました。

「奏子ちゃん、おはよう。」

「うん、おはよう。シェリーさん。」

「ふふっ、今日も元気ね。」

「はいっ！！」

煌く金髪と大きくクリつとした碧眼、すっきりとした輪郭、私もため息が出るほどの綺麗な容姿を持つシェリーさんは、数年前から私たちの生活を見てくれている協会の方です。…あつ、協会とは《国際能力者協会》のことで、全世界の能力者の登録と治安活動をしている組織です。日本の能力者学校を卒業した能力者の半分はこの協会に入ります。その職員であるシェリーさんは死んでしまったお父さんの元同僚で、その関係で今は保護者のような存在になってもらってます。

「奏子ちゃん、ちょっと悠斗くん起こしてきてくれない？」

「えっ、悠斗まだ起きてないんですか？」

「ええ。昨日ちよつと夜更かししていたみたいで…、ふあ…。」

シェリーさんは可愛らしく小さな欠伸をしていた。どうやらまた夜遅くまで仕事をしていたみたいだけど、いつ見てもシェリーさんの肌は白くて綺麗…。化粧水とかに秘密があるのかな？

「はい、分かりました。」

私は急いでまた階段を駆け上がると、一番突き当たりの部屋の前に行っテノックする。

「…悠斗、まだ起きてないの？悠斗、入るよ。」

一言おいて部屋に入ると、悠斗は涎を垂らして寝ていました。

…全く、相変わらずだらしがないんだから。

「悠斗、悠斗、早く起きて！！今日は入学式なんだから早く起きて！！」

私はいつものように体を揺らします。

「んなあ…？」

「ほらっ！！早く！！」

「……………30秒待つてやる。」

「なんでっ！！パウはいないよ！！」

「……………坊やだからさ。」

「意味分らないよ！！んもお…、早くしてよ！！」

「…ん、姉さんおはよう。」

「ふう…、ほら早く下に行こうよ。シェリーさんの朝御飯はもうできるよ。」

悠斗はワシワシと髪を掻いて、ゆっくりと体を起こします。

「ん、了解。」と聞こえるか聞こえないくらいの大きさの声で返事をする、大きな生欠伸をした。

「…で、姉さんはいつまでいるの？」

「え？」

「おっと、姉さんは弟の生着替えシーンを見たいのか。そうかそうか、ならばこちらも見せてしんぜよう！！」

「わわわわっ！！ごっ、ゴメン！！」

突然脱ぎだした悠斗に驚いた私は、顔を真赤にして急いで部屋を出ました。

「ほ…ビックリした。もう、悠斗ったら。」

最近悠斗の体を見ていない私ですが、あの体はよく覚えています。小さい頃からずっと《戦争》に身をおいて悠斗は、はっきり言って人に見せられるような体をしていません。無数の銃創や刺傷、数えきれない戦傷が全身にあります。

「ホント…無茶しちゃって…」

そのとき1階からシェリーさんの声が聞こえました。

「——奏子ちゃんっ！！今日は早く出るんじゃないの!？」
…あっ！！しまったっ！！

私は急いで階段を駆け下ります。

今日は生徒会の仕事でいつもより早く出ないといけません。入学式の準備をするからです。

「シェリーさん、朝御飯食べられます?」

「もう出来てるわ、熱いうちにどうぞ。」

「すいません、頂きます!!」

「はい、召し上げね。」

シェリーさんの熱々の手料理、スクランブルエッグやロールパンという洋食の朝食に私は飛びつく。

「——次のニュースです。」
ん?

『近日《連合》の残党が活発に活動し始めた、という情報が入ってきました。』

またか…。

『【15年戦争】が終わり既に7年が経ちました。しかし未だ《協会》は全ての《連合》の幹部を捕まえておらず、対応の遅さが批判され——。』

《連合》とは【15年戦争】を起こした《能力者絶対主義者団体^{ノスタルガン}》を基幹とした集団のことを言います。22年前、アメリカで武装蜂起した《能力者絶対主義者団体^{ノスタルガン}》の影響は一気に世界へ飛び火し、相次ぐ問題により国連は崩壊。アメリカも事実上崩壊。そして世界同時地域紛争が勃発しました。その後、無能力者^{フォロワー}を守るために、虚飾化していた《協会》を【天乃川悠介】という男が立て直し、世界を混乱させる《連合》を倒すために立ち上がりました。幾度となく衝突した二つの勢力は、ついに『天乃川悠介』が連合の最高司令かつ、【15年戦争】を起こした張本人の『アイザック・キング』を相打ちによって、戦争は終結しました。そして世界は「共生主義派」に傾き、ようやく世界情勢は安定しました。これがラグナロクの簡

単な流れです。ちなみに戦争により世界人口は一気に減りましたが、全人口は70億人。その内、能力者^{シビル}はたったの100万人です。現在の世論は、もちろん人によっては違うけど、一様に「共生主義派」の《協会》についていくという考えは共通しています。

これは2年前の高校受験での数少ない筆記科目で毎年出る問題だったから、今でもこの流れを覚えています。まあ、その時代の後半をこの目に見ていたということもありますけどね。

私はようやく朝御飯を食べ終わったので、急いで歯を磨き、リビングにおいてある通学カバンを取ります。

「あれ、姉さんも出るの？」

「あつ、うん！！…悠斗、制服よく似合っているよ。」

ちょうど制服に着替えてきた悠斗がいました。黒っぽいブレザーっぽいうちの制服は、悠斗の大人びいた雰囲気にとてもよく似合っていました。多い白髪もチャームポイントになるしね。

「ああ、ありがとう。それにしても姉さんはいつも綺麗だね。」

「うつ、うん…ありがとうっ！！」

私は顔伏せながら靴を履きます。たまに悠斗はこういうことを真顔でいうから、私困っちゃいます。

「奏子ちゃん、確かお弁当いるって言ってたよね？」

とシェリーさんがいつものお弁当箱が入った袋を私に持ってきてくれました。手触りが変わっているこの袋は、保温性が非常に優れているので一般に広く使われています。

「———それじゃあ、行ってきます！！」

「いてら。」「いてらっしやいっ」

私は悠斗とシェリーさんの声を背に受け、私は家を出ました。

さあ、今日も一日頑張ろう！！

unknown

ふあ…、んじゃシェリーさん。朝飯は？

もう出来てますよ。…悠斗さん、いいですか？

…なんだ、シェリー。何か分かったのか？朝飯食いながらでいいか？

はい。最近マスコミにリークしているグループがあるのを知ってますよね？

ああ、確か《能力者絶対主義者団体》^{ノスタルガン}を擁護しているやつか。…おっ、今日はスクランブルエッグか。

はい。その線で調べたんですが、また《連合》の幹部が浮かんできました。

…なんだよ、なんで最近になって急に増えきたな。で、誰？

【天焰】^{てんか}です。

…あのメンドクサイやつか。

あれ、戦ったことあるんですか？

…まあ何度か、な。あいつが生きてたのか？

はい。

…オカシイなあ、あいつの頭吹っ飛ばしたって聞いたけどな。

そうなんですか？

ああ。ちなみにその情報流したか？

いえ、まだです。

そうか…、一応情報止めといてくれるか？

構いませんが…、何故ですか？

それを聞いたら荒れそうなやつが一人いるからな。タイミングを
考えて教えるよ。

そうですか…、分かりました。…一つ聞いてもいいですか？

ん？なんだよ。

最終戦、悠斗さんも参加されていたんですよね？

ああ。一応な。

一応？

そこらへんでやめときな、俺を詮索するのは。

えっ？

これは注意じゃない、忠告だ。やめておけ。…消されるぞ？

…はい。

——んじゃ、シェリーさん。朝御飯美味しかったよ。

——ええ、悠斗くん。今日から高校生活頑張ってたね。

その2 鳳家一族

あらゆる機器が電子化・情報化された現代では、屋外に掲示されている新入生のクラス表でさえ電子化され空中にパネルで表示されている。

「Dクラスか…、妥当だな。」

ブレザーを多少簡略化された制服に身を包む悠斗は、大勢の新入生に混じって生欠伸を吐きながら正門付近に掲示されているクラス表を眺めた。神永学院も含む能力者専門の教育を行なっている教育機関ではレベル順にクラスが決められる。それはレベル別に教育方針が変わるためである。クラスの決め方は高レベルであるほどAクラスに近づいていく。悠斗は最下クラスのDクラスであると記されていた。

「まっ、気が楽だからいいか。」

悠斗はまた生欠伸をしながら頭を掻く。

高レベル能力者同士の子孫は高レベル能力者となる確立が高く、それは数十年も前から判明していた。また、高レベル能力者は必ず社会的に高い地位に就く。これらのことを考えると自然と高レベル能力者は資金力に物を言わせて、財閥の令嬢や子息などのエリートになるのは容易に分かるだろう。なので悠斗のような一般人がAクラスに入ると肩身の狭い思いをするはずなのである。もちろんAクラスの中にも突然変異によって一般人はいる。

「まあ…私^{わたし}、Aクラスのようにすわ。」

「凄いですわ！！お姉さま！！それなのに私^{わたし}はBクラス…、連城の恥さらしです…。」

「気にすることはありません、Bクラスも立派です。今年は高レベル能力者が多かったみたいですね…。」

「私^{わたし}は——。」

複数の女子生徒に囲まれている一際洗練された雰囲気醸し出す

一人の女子生徒は、綺麗なソプラノボイスを響かせ、自然と周囲の視線を集めていた。美しくウェーブしている淡い茶色の長い髪は腰まであり、体にあるそれぞれのパーツは小さく整然としていた。

（こらまた美人さんがいらっしやったもんだ。）

「ふぁ…」

（さっさと行くか、邪魔になったら悪いしな。）

「——あの…その方。」

欠伸を噛み締めた悠斗が立ち去ろうとしたその時、後ろからあのソプラノボイスが聞こえた。

（…まあ、俺じゃないか。）

「——あっ…あのっ!!」

（…ん?）

悠斗の腕の裾を掴まれ、振り向くとそこにはあの女子生徒がいた。

「…何か用か?」

「——あの、以前どこかでお会いしませんでしたか?」

女子生徒は顔をどこか仄かに赤くさせながら、消えていつてしまいうくらい小さな声で悠斗に問い詰めた。周囲の生徒はなんだなんだと囲っている。

（…は?）

「気のせいだろ。」

「そっ、そんなはずはありません!!あなたのベイズは、ベイタ

——。」

「おい。」

「——えっ…。」

悠斗は重く響く声で女子生徒を止める。

「何のことか知らないが、お前もしかしてラグナロクのことを言おうとしているならやめろ。タブーなのを忘れたか?それに、もう一度言っがお前とは初対面だ。」

「す…すいません。」

女子生徒は悠斗の静かな雰囲気には圧された。

「じゃ、失礼するよ。」

「…あの!!」

悠斗が背を向けた時、その女子生徒は懲りずにまた声をかける。

「……なんだ、まだ何かあるのか？」

「…私はAクラスの蒼夜奈々子そうや ななこと申します。大変御無礼かと思いますが、あなたのお名前を教えて頂けませんか…？」

洗練された動きによって、奈々子は一瞬にしてその場の空気を変えてしまった。こうなってしまうては悠斗は無碍に立ち去る訳にも
いかない。

（【鳳家一族】ほうけいちぞく…なるほど、通りでラグナロクを体験しているわけだ。）

「…俺はDクラスの天野悠斗だ。」

「えっ…」（あの方は…間違いなく高レベル能力者だったのに。

）

「じゃ、失礼するよ。」

微妙な空気になったので、悠斗はそそくさとその場を立ち去った。

（そういや、この学校【鳳家一族】ほうけいちぞくが多いって言ってたな。シェリーが…ちよいとメンドクサイことになりそうだな。）

悠斗は欠伸を噛み締め、頭を掻きながら入学式の会場の体育館へと急いだ。

「蒼夜さん…あのDクラスがどうかされたんですか？」

「いえ…、何でもありません。皆さん、お気になされず。」

その後周囲の女子生徒たちが何やら言っているが、悠斗の背中を追っている奈々子の耳には全く入らなかった。

（“ベイタ”を、コードネームであるベイタウン戦をラグナロクとすぐに分かった…。間違いありません。悠斗様は間違いなく、あの方です。）

奈々子は胸に温かい何かが宿ったのを感じた。

その2 鳳家一族（後書き）

設定を変更したため、「色持ち」を「鳳家一族」に変更。（2011/6/28）

その3 かつての戦友は想う

（ほお〜おつ、スゲーな。流石は神永学院、金持ってんね。）
と、体育館に入った悠斗は絢爛な空中装飾に感嘆のため息を吐いた。

通称パネルと言われている、ルーム・ビジョン・テクノロジー空間映像投影技術は約80年前に発明された技術だった。現在は既にラクナチウム紫紺石のおかげによって以前よりマシになったが、一世代前までの機器は全て能力者の放つシビルベイズの影響を受ける度に誤作動になる確立が跳ね上がっていくのである。未だにどのようなメカニズムかは解明されていない。したがってより影響を受けない形態を開発する研究が進んでいた。その一つがこの空間映像投影技術である。能力者との情報伝達手段が紙媒体だったこともあり、精度が誇る日本製品の後押しもあって一気に大衆化した。その後現在。100年前より遙かに画素数が上がったおかげで空中に投影される映像は視覚的に美しい。

（うお〜キレイ〜）

空中に舞う白銀の星々。プロがデザインしたであろう「新入生の皆さん、入学おめでとうございます！」の空中に浮く巨大な垂れ幕。時間経過によって色と位置が変化していく飛びりボン。まるで妖精が住んでいるような綺羅びやかなだった。

（おっと、このままつたつたたら邪魔だな。早く席に座るか。）
A.I.新Dクラス生用の自動移動式の席を搜すと、そこには思わぬ知り合いが端に座っていた。

「よう、イチロー。生きていたか。」

赤毛が特徴である精悍な顔つきをしている男子生徒の隣に悠斗は座った。

「…え〜と誰だ？」

男子生徒、一郎は怪訝な顔をした。

「…おい、戦友の名前を忘れるバカがどこにいんだよ。」

「——あああつ——！お前つ——！」

「お、思い出したか。」

「おう、すっかり思い出した。ひさしぶりだな！……にしても変わったな、お前。」

「そうか？」

「ああ。あの時は何か優等生っぽかったけど、今はまるで不良だぜ？」

「……まあ、色々あったんだよ。」

悠斗は疲れた笑みを見せた。

「……さて、と。で？俺の名前は何だった？ん？」

「あのお、え、っと、うん。ほら……ね」「一郎は如何にもお道化た顔を見せた。

「……はあ、一緒に【サン・イチ・イチ311部隊】にいただろ？」

「ゆ、ゆー……、なんとか！」

一郎は声を殺し、顔に真剣味を増して耳元に言った。

「バカ。俺は『天野悠斗』って名前だ。」

「うん。今まさに名推理で当ててやろうとしていたところだ。思ったとおりだったな！」

「いや、名前は推理するものじゃなくて思い出すもんだろ？がよ。……まあ、変わってないようだなによりだ。」

二人は数年まで戦争をしていたと思えないような光景を眺めていた。

綺麗な服を着た新生入生たちとその父兄たち。華やかな会場。

誰もが、今、笑って、喜んで、胸を躍らせている。

「……今。平和なのか？世界は。」

一郎は独り言のように言った。

「さあ…、ただ今は低強度紛争しかない。——まあ、一応相対的な平和だな。今の世界は。」

「…最近さ。」

「ん？」

悠斗は遠くを見ている一郎の横顔を見た。

「俺たちのしたことはよかったのか、って思っちゃうんだよ。」

「…………。バカが突然どうしたんだよ？」

「失礼な。俺はバカじゃない、アホだ！！…あいつらが言っていたことは確かに分かったし、ある程度は当たっていると思う。…だけれどよ、殺す必要は…あつたのか？」

「…あの時、殺す以外の手段はあつたか？」

「…いや、なかった。けどよ。」

「お前の気持ちは痛いほど分かる。でもな…。」

悠斗はまっすぐに一郎の目を見た。

「『認めてくれないから、分かり合えない。分かってくれないなら、力で抑え、無能力者を支配する。』っていうあいつらの考えは、破滅しかその先にはなんだよ。」

「…ああ、そうだった。——やっぱりバカだ、俺は。」

「安心しろ。バカじゃなくても迷うんだよ、人は。」

「そうかい、なら安心するよ。」

「ああ、そうしろ。——こんな話題はやめよう、一高校生がする話じゃねえよ。」

「はは、ちげえねえっ！！」

二人は笑みを見せた。

その3 かつての戦友は想う（後書き）

御感想を頂けると励みになります、是非とも御感想を…。

（ 2011/6/28に前話「その2」にて鳳家一族に設定を変更しました。申しわけありません。）

その4 新たな仲間たち

「——ねえ、ここってDクラスの席だね？」

ふとまだ空席だった左を見ると、二人の女子生徒がこちらを伺っていた。

「ああ。ちなみに、そこ、空いているぞ。」

「あつ、なら……。」

感情が豊かそうな女子生徒が、もう片方の女子生徒に微笑みかけ、二人は座った。微笑みかけられた女子生徒は少々遠慮しているようだ。

「ねね、もちろん二人ともDクラスだね？」

感情が豊かそうな女子生徒はどうも高い社交性も持っているようだ。

「ああ、これからよろしく頼むよ。天野悠斗だ。」

「うん、よろしくねっ。——私の名前は白鷹しらたかりょう良子りょうこって言うの。」

（ほお、なかなか可愛いじゃん。しかも【裏鳳家一族】？…なわけないか。）

少々クセツ毛がある茶髪、親しみやすそうな愛嬌を醸し出す顔立ち、人懐っこそうに良子は悠斗の手を両手で持ちながら言った。

「俺の名前は伊集院いじゅういんいちろう一郎いちろうってんだ、あだ名は『イチロー』って呼ばれてる。よろしくな。」

「いや、それあだなっていうか下の名前そのままだね。」

「こいつは喋る時に限った話でもないけど、頭使ってないからあんまり気にしないでやってくれ。」と、悠斗は乱暴に一郎の頭を撫でる。

「おいおい、勝手に人をアホキャラにしてくれんなよ。失礼、御ぶっこきあそばせ！」

「このとおりの馬鹿だ。相手していて疲れるやつだが、悪い奴じゃない。」

「だから馬鹿じゃなくて——っ」

「はいはいこのアホ。」

「……うん、何かがおかしい気がするが……。」一郎は必死に眉をよせる。

「——二人は知り合いなんだ。」

その一連の流れを見ていた良子は楽しそうに笑いながら言った。

「ああ、数年ぶりに会った旧友だけだな。そっちは？」

「いや、その掲示板で意気投合したばかりの仲なんだ。ねっ、ことみちゃん。」

「——あつ、うん……。」

（へえ……こっちは大和撫子、っぽい感じだな。）

重力に逆らわずに落ちる長い黒髪、線が細い印象のことみに、悠斗は社交性が高そうな良子と打って変わって如何にも人付き合いが苦手そうな心象を受けた。顔をあげず、悠斗と一郎に話しかけようとする試みもない。顔見知りなのかと悠斗は思った。

「……んま、よろしくな。名前は？」

「北浜……きたはま北浜ことみです。——あつ……。」

握手を求めた悠斗の手をことみは見ると、身を強ばらせた。

「ん？何か付いてるか？」

予想外のことみの反応に悠斗は自分の手を見る。

「あれ、ことみちゃんは男性恐怖症？」

「……あつ！！あのね、悠斗くん。ことみは少し——」

場の空気に敏感で、事情を知っている良子は場を取り繕うように声をあげる。

「——良子ちゃん、いいよ……。」

「……えっ、でも……。」

（ん？なんだ？）

「私……変わるって決めたんだっ」

ことみはまるで自分に断言しながら悠斗の手を掴み、目を閉じ固い握手を交わした。

「——あれ？」

するとことみは驚いた目で悠斗を見た。

「…どうしたんだよ、今さっきから。」

悠斗は苦笑いしながらそのことみの反応に返す。

「え…、あれ？」

ことみは今度は悠斗の手を何度も握る。

（恐怖する…握る…、もしかして。）

「——お前の《系》^{ライン}、もしかして《共感系》^{シンパシー}か？例えば接触型の^{シビル}。

能力者の能力を区分けするとき、必ずまず《系》^{ライン}に分けられ、その次に能力をより詳しく表す言葉がくる。例えば、発火能力であれば《自然系》^{ナチュラル}の【火炎】というふうになる。

「えっ…」ことみはブルツと体を震わせる。

（おうおう、小動物みたいで可愛いね。）

「お前らが言ってきたことをまとめてみるとそうなるんだけど、どうなんだ？」

「…ふっ、実は俺も——。」

「嘘をつけ、このアホっ！！」

ドヤ顔で言う一郎に悠斗はことみに握られていない手で頭を叩く。

「…んで、どうなんだ。しかもその能力をコントロールしきれないんだろ？」

「——実はそうなんです。私、まだ未熟で、昔から手とかの簡単な接触で相手の思考を読み取ってしまう【読心】なんです。…でもなんで…？」

「ああ、俺はちよいと特別だね。そういう能力者^{シビル}の能力を受け付けないんだよ、俺の体は。まあ、俺が意志的に受け付ける時は別なんだけど。だからそういう《共感系》^{シンパシー}だったら、俺の思考は読み取れないんだよ。悪いけど。」

「能力者^{シビル}なのに《ベイズキャンセラー》？まさか、能力が《反抗系》^{レジスト}だとかとか？」良子は大きい目をさらに大きく見開いて、好奇

心が痛いほど分かるくらい悠斗を見つめた。

《ベイズキャンセラー》とは極稀に無能力者フオロワーの中にエネルギー量子の影響を受けにくい体質を持つ者が現れる、その体質は【エネルギー量子無効化能力】の事と言う。能力者シビルの存在が確認された後から徐々に現れた。その数は世界に100人程度しかおらず、能力者ルが絶大な力を持っている今、どの分野においても非常に重宝されている。それほど珍しい存在が目の前になれば、良子の反応もおかしくはない。

「いんや違うよ、俺の能力は《操作系》オペレーションの【飛行】さ。悠々とのんびり空を飛べるね。ちよつと変わった体質だからよく協会の研究室に行くんだ。」

「へえ、ちなみにバカは？」

既に一郎の扱い方が分かった良子は早速言った。

「だから俺はバカじゃない、アホだ！！…んで、俺は《自然系》ナチュラの【土】、土砂を操るっていうちやちい能力だな。お前は？」

「私は《強化系》レイフォースの【全身強化】、まあ在り来たりの能力だね。」

（全身強化か…、なかなかいい能力じゃないか。——んで。）

「ことみ…、いつまで俺の手を握っている気だ？」

本当に読めないのかずつと試していることみに悠斗は苦笑しながら言った。

「——キャッ！！ゴメンなさいっ！！」

するとこよみは慌てて、悠斗の手を話す。仄かに顔を染めているのが何とも可愛らしい。

「んま、よろしくな。お二人さん。」

新入生の入学式が始まり、肅々と進んでいく。

（だりいな…、まあこういう行事は退屈なのは当たり前か。Aクラスのやつらは違うみたいだが…。）

よく分からないオッサンが話している中、ふと悠斗は右前のAクラスが座る方を見た。既にだらけているDクラスの生徒とは違い、目を爛々と輝かせ背筋を伸ばし、これから始まる学校生活に早くも胸を膨らませている。

「——おっと、あいつもここに入学したのか。後で時間があつたら話してみるかな。…あら？ 奈々子嬢がいねぞ？ 如何にも選ばれし者、っていう雰囲気煌々と纏うあいつならすぐに見つかるはずだが、見当たらない。もしかして死角にいるのか？」

「——次は新入生からの挨拶です。」
拍手によつて迎えられた一人の女子生徒は、毅然とした態度で台に立った。

「——新入生代表、蒼夜奈々子（そうや ななこ）です。この度は新入生代表として、答辞を読ませていただきます。」

（なるほど、新入生代表か…。どうやら今年のトップはあいつみたいだな。）

「——【15年戦争】が終わり、既に7年が経ちました。しかし、以前として世界は混迷の道を歩んでいます。その戦争で私たちシビル能力者は無能力者と共に歩んでいくことが、この先の未来へ私たちを存続させていくのだと知りました。…今日、新入生は107名入学します。未来の世界を担っていく私たちは、今後厳しい試練が待ち受けているでしょう。しかしそれでも私たちは先輩や先生、この神永学院で多くのことを学び、それらを切り抜けていきます。…これで答辞を終わります。」

奈々子の答辞は盛大な拍手によつて迎えられた。

（無難な答辞だな…。まあ戦争を終わらせた甲斐があるな。こういうのを聞くと。）

「——次は新生徒会執行部会長の碓氷友愛（つすい ゆあ）さんに、新入生への挨拶です。」

すると先程の奈々子を初々さを一気に清涼によつて洗い流すような、麗らかなある女子生徒が現れた。金糸のような流れる髪、どこ

か頬へんで居る唇、慈愛が満ちている碧眼。

（こいつが姉さんの上司か…。紅條くじょうから聞いた通り、なかなかの手練みたいだな。）

マイクまで歩む一步一步に注目した悠斗は、素人ではない異質の歩法を感じた。

「なあ悠斗…。」「なんだイチロー。」

友愛がマイク調整をしている間、突然隣の一郎が悠斗の耳元で囁いた。

「…“蒼夜”といい“碓氷”といい、なんでここ【鳳家一族】が多いんだ？」

「…おめえ、【鳳家一族】って知ってんのか。」

「今も俺は裏社会で関わりがあるんだよ、それくらい知っておかなきゃマズイからな。…んで、やっぱりここって【鳳家一族】の御用達か？」

【鳳家一族】とは、高レベル能力者を数多く排出している“蒼夜”や“碓氷”などのある特定の家系を指す言葉である。能力者が現れる前から裏社会から“表”社会を操っていたと言われる【鳳家一族】は、戦後さらに力を蓄え、今では日本経済は【鳳家一族】によって運営されているということすら言われる程の力を持っている。

「ああ、特に“蒼夜”と“碓氷”の連中は大抵ここに——。」

（（——つ！?!?!?!））

そのとき、お互いの目を見ていた二人は同時にアリーナの後ろを見た。

「「なっ!?!」」

二人が驚愕した。ある父兄に扮した男が振りかぶって投げたもの

は…

カウンターメジャー

（対能力者用グレネード!?!）

戦時中よく二人が見ていたものだからだ。

その5 F a r c e

「——イチローっ!!」

「——ああっ!!」

悠斗の呼びかけに応じた一郎は、すぐに能力【土】を発動し、先端が尖った長い棒を生成した。それを掴んだ一郎は、その二発のグレネードに向かって投げ、見事命中し、爆発した。

その間に悠斗はテロリストらしき男に近づき、無力化するためにスーツの胸ぐらをつかむ。もちろん男は反応し逆に技をかけようと悠斗の腕を掴み、体全体を使って投げ飛ばそうとした。

(こいつ、出来る!!)

ふと教壇に立つ友愛を見ると愉快そうに微笑んでいた。

「——そういうことかつ!!」

毒づいた悠斗はエネルギー量子を使い一時的に身体能力を上げると、男の力を無理矢理抑え、乱暴に男を空中に上げ、ド派手に顔から床に叩きつけた。体術の心得が全くない力任せの投げだったが、男は鼻血を出しながら気絶した。

一瞬何が起こったか分からず茫然としていた生徒たちだったが、悠斗たちの一連の騒動を咀嚼すると、事態を把握した。自分たちがテロに遭い、命を落とそうとしたことを。

「——皆さん、お静かに。」

友愛の声がマイクを通りフロアに響いた。静かながらも、一つ一つがはっきりと分かる友愛の声に誰もが反応し、動きを止めた。

「——私の茶番に付き合わせてしまい、申しわけありません。今、その男子生徒が無力化している者はうちの者です。」

友愛は呆けている全体を見回し、そして再度ゆっくりと口を開いた。

「——皆さん、私たちは能力者^{シレル}です。その意味を皆さんはちゃんと分かっていますか?…もし、あのグレネードが本物だったら?

もし、その男子生徒がいなければ？間違はなく、私たちは死んでいたでしょう。つまり『私たちは能力者^{シビル}である』ということは『いつ命を狙われてもおかしくない存在である』なのです。私が言っているのは極論かもしれませんが。だからこそ『この事』を私たちは意識しなければなりません。……ですがそれは大変難しいことです。なので私たち【新生徒会執行部】は1年間だけです、皆さんが無事勉学を熟し、卒業させることをここに誓います。——これで私の話を終わります。」

友愛の話が終わった瞬間、奈々子以上の盛大な拍手になった。

「——隊長、お久しぶりです。」

気絶させられた男の背中に腰を下ろしている悠斗に、Aクラスの方からある男子生徒が現れた。その男子生徒は黒人で、体のパーツ一つ一つが整然としており、カッコイイというより美しいという印象を受ける。

「ああ、ガイ。ありがとな、爆風弱めてくれて。」

「いえ、あれくらいならば御安いことです。しかも弱い方でしたからね。」

おそらく本物である先程のグレネードの爆風や衝撃が半減したのは、ガイの能力によるものだった。だが、悠斗たちがよく使われていたものとはかなり弱い。

「ハハ、そうか。……それにしても久しぶりだな。7年ぶりか？」

「はい。また貴方と組めることを光栄に思います。」

「固くなるな、ここじゃあ単なる旧友^{ダチ}だ。後、俺の名前は天野悠斗だ。」

「——はい、失礼しました。悠斗さん。」

「それでいい。」

悠斗は戦友の相変わらぬ真面目さに懐かしさが込み上げ、苦笑した。

「——悠斗、大丈夫か？」

今度は一郎が悠斗のもとに現れた。

「バカヤロウ、俺を誰だと思っていやがる。…だけど、やられたな。」

「ええ…、あの生徒会長はなかなかの腕を持っているようですね。」

「…はっ？どういうことだよ？」

相変わらずの一郎にガイは苦笑した。

「貴方も相変わらずですね、考えてみて下さいよ。あの言葉を納得させるためでしたらもつと簡単な手があります、ですがあの生徒会長はこの手段を取った。」

「つまり、他に狙いがあったということか？」

「…はい、その通りです。」（この人も成長するんですね。）

以前よりも察しが良くなった一郎にガイは内心驚いた。

「んじゃ、その狙いつてのはなんだよ？」

「——俺たちみたいな【存在】を炙り出すため…だな。」

「炙り出す？」

「ああ…、多分使える手駒を確認しておきたいんだろうさ。もしくは単なるトラブルメイカーか、だな。後者であって欲しいが、鳳家一族の人間だからな。あれ。」

悠斗は手を振り笑顔を振りまく生徒会長を見ながら、ため息を吐いた。

（…あの生徒会長、どうも食えないな。一応注意しておくか。）

その6 精鋭の価値

「会長、お疲れ様です。」

友愛は控え室に入ると、一人の外見にあまり特徴のない男子生徒が友愛に話しかけた。彼は吉田翔太郎^{よしだしょうたろう}、生徒会執行部の書記を務めている。

「ええ、奏子さんは？」

「相当ご立腹です、今は小晴^{こはる}が落ち着かせています。」

「そうですね、でもとても良い人材を見つけることができました。」

友愛は自分と目を合わせた青年について考えていた。

瞬時に周囲の状況を確認し、最良の方法をなんの迷うもなく行う。そしてその間に状況を俯瞰して見ることも忘れない。間違いなく、

【逸材】である。

「これで…今年こそ『コンテスト』で成績を残せますね。」

「ええ。」

『コンテスト』とは、毎年開催されている能力者^{シビル}の競技会のことである。幾つかの部門で分かれているが、中でも【戦闘部門^{コンバット・セクション}】ではコンテストで最も白熱した物が見られ、人気の部門である。コンテストは恒例として生徒会が選出した能力者^{シビル}、及び学内コンテストの優秀者が出場権を持つ。しかし殆どの出場者は生徒会が選出した能力者^{シビル}であるので、ある意味生徒会長の手腕がここで試されるのである。

「——友愛先輩っ！！」

「おや、奏子さん。どうかしたのですか？」

奏子は如何にも怒っているという雰囲気を出しながら、先輩である友愛に詰め寄った。

「おや、じゃありませんっ！！あの茶番は一体何なんですか!？」

「あれは遠隔式のもんです。あれが普通に席に落ちたら起爆しな

いようになつてますよ。」

「そういう問題じゃありませんっ！あの内容ならわざわざする、……まさか。悠斗をコンテストに使つつもりですか？」

「確か貴方の弟さんでしたね。ですが、あれほど優秀なら高レベル能力者ですからコンテストに使つても何の問題もないでしょう？」
奏子は安心したため息を吐いた。

生徒会から選出するとしても、コンテストの出場者は基本AクラスかBクラスくらいの能力者シビルでないとならない。それはレベルが大きければ大きいほど強く、レベルに上下の格差があればそれは一方的な「虐殺」となる。それほどレベル差は大きいのである。

「残念でしたね。悠斗はDクラスです。」「……なっ！？」

翔太郎は飛び上がり、友愛はあまりの驚きに二の句をつげられなかった。

「それは……本当ですか？」

「翔太郎先輩、本当です。私の可愛い弟ですからさつき名簿で確認したんです。間違いなく、悠斗の名前はDクラスの中にありました。」

「あれほどの逸材が……」友愛は素直に驚きを表した。

「——しかし変わってますね、去年主席で入学した貴方の弟さんが、まさか【Dクラス】落ちこぼれとは……。優れている姉と、劣っている弟ですか。」

翔太郎は考え込んだ。通常兄弟・姉妹の資質と能力は多少違ったとしても、基本的にはレベルが同じである。

「落ちこぼれ……ですか。」奏子は眉を寄せた。

「奏子さん？」

「自分の弟をバカにされて気分を害さないとお思いですか？」

「——それは大変失礼しました。」

翔太郎は自分が言うべきではないことを気づき、普段は見られない奏子の冷たい怒りにすぐに詫びた。一方、友愛は奏子の反応に驚いていた。

（通常は全く感情を頭にせず笑っているのに…、やはり弟という存在は大きいようです。）

「…まあ、別に気にしていませんが。それより、今後ああいう事は私に相談してからにしてください。あんなふうに驚かされるのはもう嫌です。」

「ええ、そう致します。」

「——では、これから私は説明会の司会があるので。」

「はい、よろしく願います。」

奏子は控え室から出て行った。

「翔さん、お願いがあります。」

「なんでしょう？お嬢様。」

翔太郎はすぐに執事のような身の熟しになった。

「先日私が頼んでいたことはできましたよね？では、あの男子生徒3人の素性を此処に。」

「はい。」

翔太郎はパネルを友愛の前にパネルを出し、すぐに手持ちのデバイスを渡した。

「ありがとうございます。——翔さん、本当にこれだけですか？」

「はい。」

友愛は表示されている情報の少なさに驚きを隠せなかった。

鳳家一族には“裏表”関わらず様々な情報が集められる。海外の大物政治家の脱税の情報から国内の高レベル能力者まで、鳳家一族が知らない情報がないと言っても過言ではないほどの情報収集能力を鳳家一族は独占しているのである。

「これには…普通の学生の経歴と全く変わらないのではありませんか。」

「はい。」

翔太郎はそういうと口を閉ざした。

（あり得るはずがありません…、あれほどの実力者であれば何らかの形で報告されるはずですが、ここにはありません…。――

——もしや。）

「翔さん。分からないのではなく、書かれていないのですか？」

「——はい、その通りです。」

翔太郎が無言の感嘆をついている間、友愛は笑みを零さずにはいられなかった。

（鳳家一族にないということは、どこかで情報が止められている証拠……。つまり、裏社会に通ずる能力者^{シビル}に間違いありません。あの歳で裏社会に通ずる程の能力者^{シビル}は間違いなく、15年戦争を生き抜いた【精鋭】に違いありません。以前に天乃川悠介の背中を守ったと言われるほどの実力者である紅條緋妃氏^{くじょう あけみ}とお手合わせさせて頂きました^{シビル}が、全く齒が立ちませんでした……。ならば緋妃氏^{あけみ}と共に戦った能力者^{シビル}であれば【落ちこぼれ】であつたとしても、それは間違いなく強者^{つわもの}……。これは必ずコンテストに出さなければなりませんね。）

「——翔さん、紅茶を。」「かしこまりました。」

気分のいい友愛は翔太郎の紅茶を飲むことにした。

（ふふつ、これは愉快なことになりそうですね……。）

その6 精鋭の価値（後書き）

キャラ生きない…。

くっ、これがオリジナルの強さか…っ！？

これにて一旦第1話は終わります。

本格的なバトルは第2話「リアルワールド事件」にて。

さて、もう一つの小説のために「魔法少女リリカルなのはStrikerS」を見なければ…完璧内容忘れてます。ちなみに数年前から「魔法少女リリカルなのはStrikerS」の二次小説を書いてますので、元ネタを知っている方は是非ともそちらを。設定好きの私らしいものになってますww

では、また次回。ご意見・ご感想お待ちしております。

2011/7/19 一部を加筆修正。

その1 セシリア・ディア・カリス

悠斗は密閉された白銀色の室内をボールのように跳ね回り、小さな金色の物体を追いかける。

「——こつ、のっ!!」

最初は大きく距離を離されていたが、物体の動きを見続けある程度の予測がつくようになった悠斗は徐々に距離を詰めていく。物体も負けじとさらに動きを複雑化し加速しているが、機械では計測不能である《本能》インステインクトによってついに悠斗は金色の物体に触れた。

ビーっ!!

金色の物体は空中に拡散し、負けを認めると室内にけたたましいビーブ音が鳴り、空中にいた悠斗はゆっくりと床に着地した。そして計測用具であるヘッドセットとグローブ、シューズを脱ぎ捨てる。

「お疲れ様です。またいいデータが採れました。」

室内に怪しい女性が入ってきた。祝儀用だと思われる白スーツの上に白衣、そして白のフレームのメガネ。しかし表情がない服装と対照的に数色に煌めく金髪と宝石のような碧眼の麗人。全身白色の妙齡の女は知的な雰囲気醸し出しているのも何とも異様な空気を纏っている。

「そいつはよかったな、セシリア。今回はなかなか手ごわかったよ。前より動きが読みにくくなった。」

「あれだけの数の関数を使ってもまだ『読みにくい』ですか…、やはり人間は奥が深いですね。」

「まあ。シェリーは？」

「愚妹は今自分の武装の調整で忙しいみたいです。そういえば学校に入ったそうですね？」

「ああ、神永学院にな。」

「ほお、あの名門に……。まあ貴方なら余裕でAクラスに入れるでしょうが。」

「残念、俺はDクラスだよ。」
落ちこぼれ

「……おや？考えがあるのですか？」

「カイトの能力を使うわけにもいかないし、Aクラスの選民意識が嫌いなだけだ。しかも聞いた話によるとDクラスは結構お気楽な集団だそうだ。なら、そっちに行った方が楽しいだろ？」

「なるほど、貴方らしい。……悠斗くんは神永学院に入ったんですよ？」

セシリアは突然深刻な顔になり、悠斗に近づいて耳打ちし始めた。

「ああ、どうかしたか？」

「最近研究者の友人に聞いたのです……。あまり良くない噂を。」

「……なに？」悠斗は眉を寄せた。

「【リアノルドタイプ】という増強剤の種類を知ってますか？」
ブースター

「いや、耳にしてないな。最近開発されたものなのか？」

「はい。安っぽい研究者が開発したんですが……。ナノテクノロジーブースターを利用し、錠剤タブレットでありながらたった5分で効果が現れる増強剤の

総称です。しかも最近裏市場に出回っているのは……ギアノーバルを

リアノルド化したものだそうです。」

「ギアノーバルっ！？嘘だろっ！？しかもあれは戦時中に製造工プロセス程がなくなっただけだろ！？」

「ええ……。そのはずですが誰かが見つけたらしいみたいです。」

「ハハ……マジか。」

ギアノーバルとは増強剤の一種である。効果は他の増強剤を大きく引き離し、驚異を通り越し異常な効果を持つ。通常の増強剤では

レベルが1つ上がればいい方なのだが、ギアノーバルでは殆どの確立で2つ以上レベルが上がる。しかも保存が容易なので戦時中に広

く出回っていたが、使った分の反動が他の増強剤の数倍以上であり、

大抵は狂人となり敵味方関係なく暴れるという最凶の増強剤である。そのため、その脅威性が戦争を泥沼化させている要因だと見なした

悠斗たちは、ギアノーバルを唯一製造していた組織を徹底的に潰した。
ヴァージニア・ロキ

「まさか…、そのリアノルド化したギアノーバルが神永学院付近で出回っている…とかじゃねえだろうな？」

「そうでなきゃ知らせませんよ。」

「はあ…、後でシェリーに調べさせるよ。」

急に白髪が増えたように見える髪のを悠斗は荒々しくかき回す。

「全く…退屈しそうにないな。高校生活も。」

その1 セシリア・ディア・カリス（後書き）

先に「にのない」が書き上がったので投稿します。
さて、なのは見なきゃ…。

一部加筆修正（2011/8/8）

その2 二人の環境

「どう？学校は慣れた？」

「ん、まだ始まったばかりだから何とも言えないな。」

登校中。見慣れているはずなのにどこか真新しさを感じる奏子を目の前にしながら、悠斗はやる気なく返答した。

DNAコンピュータなどの登場や集積回路のホールトン効果の克服、個人情報保護方針がさらに強くなっている時代の潮流、そして人類は数十年とは比べ物にならない程に演算能力を獲得したおかげで大型陸上輸送機関は様変わりしていた。昔車両は数十人の容量が常識だったが、今ではたった数人を運ぶのが現代の電車である。これはまだ技術が突出して進んでいる日本のみでしか見られないので、無数の電車セルがそれぞれ違ふところへ行く光景は外国人にとっては圧巻である。

しかしこれが日常である悠斗たちは窓に流れる光景を眺めながら雑談を続けた。

「それもそうか、昨日今日はまだ説明だけでもんね。」

「ああ。B級ライセンスを持っている俺は理解しているけど、周りの奴らはちよつと大変みたいだけだな。」

《力持つものは、それ相応の責任をもたなければならない。》

力を持て余さず、無闇に使わない。『救出活動に向いている能力を持つている能力者は、もし災害が起きたときは参加する』だとか『治療系の能力を持つている能力者は、もし緊急性の高い怪我人がいれば治療する』という、つまり状況によって使用することが望ましい。もちろん闇雲ど素人に使う能力者はただ状況を混乱させてしまうので、これは全ての能力者に生じるものではない。

そこで出てくるのが【ライセンス】である。

【ライセンス】は責任が生じる18歳以上の能力者が全員必ず取得するもので、能力者を専門に教育している全ての機関はライセン

スを取得することを目指している。また、よくある異世界トリップ物で出てくるギルドのように、ライセンスは「S・A・B・C・D・E」まで分けられている。ランクが高ければ高いほど、様々な活動に参加する権利・指揮権、そして社会からの名声を持つ。例として悠斗のBクラスのライセンスは社会的に見れば、大企業の専属能力者になり、ビジュアルが良ければCM出演があるほどの地位を持っている。ちなみにライセンスは18歳未満でも厳しい試験を通れば取得することができる。

「しかし、案外メンドクセーんだな、『Tライセンス』って。」
「まあね、でも自然に覚えるから気にしないでいいよ。」

ライセンスの予備軍と言われている高校生たちは「Tライセンス」というものを1年生の間に取得することが、二年生に上がることの必須条件になっている。自動車学校という仮免許と似ているTライセンスの制限が、悠斗は多少困惑している。

《緊急時を除き、クラスC以上のライセンスが同伴している場合のみ使用を許可する。》

“緊急時”って何だよ？能力者が必要な場合が“緊急時”じゃないのか？しかもC級以上って何人いるのか知っているのか？だいたいC級ライセンスに子守を任せられるのか？？？つと、悠斗は思ってしまうのである。もちろんこれは戦前から問題になっていたが、利権の問題か何らかの問題で変更されていない。

「それにしても、悠斗は凄いよね。私去年Tライセンス取ったからよく分かるけど、B級ライセンスを持っているなんて。」

「間違っても他人に言わないでくれよ？C級から《ライセンス保持の黙秘義務》が未成年には適用されてんだから。」

「分かってるよ。私も変な団体から勧誘されたくないしね。？？？そっいえばこの前、中東に行ったんだよね？A級の人と一緒に。」

「ああ。くつだらねえ事件だったよ。『妻との離婚問題で能力と爆弾を振り回している』っていうレベル5のA級ライセンスを黙らせに行くなんて、姉さんも気をつけるよ？ハイランカーつっても、

唯の人間なんだからな。」

「うん。分かってる。…私たちだって所詮は人…なんだからね。」
「????今日説明が終わった後は何すんの?」

「明日以降?まず明日は能力審査で、数日後からは通常授業が始まるよ。みんな大好きシビラル・ウェポンの授業もね。」

「へえ、シビラル・ウェポンね。まっ、俺たちDクラスは大したシビラル・ウェポンは使えないだろうけどさ。」

「悠斗はDクラスと言っても最強のDクラスでしょ?私より最新型^{ヤッ}使えるじゃないの?」

「俺がB級ライセンスを見せればね、唯のDクラスには無理だよ。」

「レベルはエネルギー量子使用可能量に比例する。全ての能力者専用武器又は能力者専用器具はエネルギー量子を利用しているので、より高いレベルの認定者は、より多くのウェポンやデバイスを使用することがある。つまり低レベルに認定された者は、高レベル認定者よりも遙かに単純なツールしか使えないのである。」

もちろん例外は存在するが。

「まっ、《Lツール（低レベル認定者用ツール）》はかなり丈夫にできているからな。使いようによつては《Hツール（高レベル認定者用ツール）》よりも使えるから気にしてないけど。」

「そっ、そうなんだ…。私はHツールしか使ったことがないから知らないけど。」

「そういえば、姉さんの専用ツール決まった?」

「まだ。じっくりこないくてさ…全部、一応射撃系にしようかなって思っているんだけど。」

「ふうん…、まあ焦らず決めればいいよ。ライセンスを持っても決まっていな能力者だっているんだから。」

「そっか。」

その時到着を知らせる音が鳴り、間もなくして扉は開いた。そしてそれぞれの友人を見ると、

「もうか…、んじゃ姉さん。」

「うん、またね。」

二人は別れ、校舎へと移動していった。

その2 二人の環境（後書き）

ちよつと説明するつもりが、こんなに長くなってしまいました…。
制度などの説明が上手く言えてなければ、感想にて指摘して頂ければ幸いです。

その3 事の始まり

人というのは自分の周囲でよくあることが常識とってしまつてとが非常に多い。

これは心理学においても注目されてきたことで、妙な新興宗教が洗脳する際に団体に所属する人間で対象の人を長期間することによって、その対象をその宗教の考えに染め、宗教団体に心酔させることが昔よくあつたそうだ。

もちろん俺には心理学のその話は関係ないことだが、…いや関係なくはないか。

とまあ、俺はどうでもいいことを頭で思い浮かべながら作業に勤しんでいた。

「はい、次の方。カードをおいてくださいね——。」

俺は今、神永学院高等学校の能力査定シビラルテストの補助員として意味の分からない機械を操作している。意味の分からないと言っても俺が理解していないだけで、能力者関係の技術で日本の厳しい規定を通つた計測器だ。人体に悪影響を及ぼすことは全くない機械…だと思う。

まっ、とにかくよく分かつていないんだよ。俺にやあ関係ないけどね。

行列が教室の外まで続いているのを横目で見つつ、被検体が所定の位置についたことを知らせるランプを確認し、計測開始のボタンを押す。

楽だけど、ダルいね。この仕事。

ちなみになぜ俺がこんな仕事をしているかという、表向きは“ベイズキャンセラー異常体質”のせい、裏向きは“カイト”のせいで、特殊な機器を使用した能力査定をよく受けさせられている。つい先日にも定期査定をされた。戦争が終わってからずっとそうだったから、普通能力者はそれぞれ協会に行つて査定されているもんだと思つていた。まあ、少し考えればそんなことなんてあるはずないよな。そんなムダなこ

と。

俺、特異な存在ってこと忘れてた♪アハッ

そんなこんなでこの学内一斉査定会に参加する必要がない俺は、授業が始まっていけないのでさっさと帰ろうとしたら、

「あつ、君奏子ちゃんの弟だよな？暇？なら補助員になってよ。ね？じゃ、決まりね。いやあゝ助かった助かった、後一人必要だったんだよね♪」

姉さんの友人らしき女子生徒にいつの間にか計測器の補助員として俺は今アルバイトしてる。

お金出るから流されちゃった♪アハッ

「悠斗くん…だよな？」「ん？」

ふと声をかけられた方を見ると、先程俺を無理矢理補助員にした女子生徒がいた。

「交代だよ！」「そうですか。」

俺は学生証を当て補助員の設定を変更すると、女子生徒の後ろに着いてきたとある男子生徒に席を譲った。

「お昼まだだよな？一緒に行こう！」「は、はい…。」

断る理由もなく、学内の構図も頭の中に入っていないから、とりあえず着いて行くことにした。

「紹介してなかったね。私東小晴^{ひがしこはる}、奏子ちゃんの友達なんだ。よろしく・ね♪」

「は、はあ…よろしくお願いします。」

中学生くらいの背の低くさ、独特のトーン、黒髪を染めた茶髪に、ちよつと濃ゆめの化粧をしている。これまた個性が強い娘^こが来たもんだ。ちなみにうちの学校含め能力者専門の教育機関は髪型・服装に関してかなり寛容だ。通常教育機関はそれぞれけど、とにかく

やることやっていたら向こうからは全く注意はない。神永学院のこ
ういう所はいいね、うん。

「堅いぞお？カタカタだぞお？奏子ちゃんの弟くんなら私のお友
達だよね？ほら、肩の力抜いて！敬語とかクラスとか私全く気にし
てないからさ。ね？」

この屈託の無い笑顔。確かに姉さんと通じそうな感じだな。

「ん、分かった。んで、なんて呼べばいい？東先輩？小晴先輩？」

「わお、ホントに力抜けたね。好きに呼んでいいよ。“こはるん

”でもいいし！」

「それは遠慮する。んじゃ、小晴先輩。先輩も執行部の人間なの
？」

「うん！奏子ちゃんの補佐、副会長補佐だね。」

「副会長補佐？そんなもんもあんのか。」

「まあね。副会長つて結構忙しいから補佐が着くのが恒例なんだ
あ。でも、奏子ちゃんは優秀だからプリント整理とか小さな仕事
しかないけどね。」

「だろね。姉さん異様に理解も仕事早いし、おまけに底なしの体
力だからな。」

「だよねだよね！？徹夜してもケロッとしているし、どんなに疲
れても全く変わらない！！凄いよね、本当に。」

「でも案外ネガティブだから大変なんだよな。」

「えっ、そうなの？」

「ああ。入学式の日の夜だつて司会１回噛んだつて落ち込んでた
しな。」

「へえーそうなんだ…、やっぱり弟だと奏子ちゃんのこといつぱ
い知ってるんだね…。」

「まあな。多分俺世界で一番姉さんのこと知っている自信がある
よ。んで、聞きたいことあるんじゃないの？」

「えっ！？」

「それでもなかったら、普通昼飯に誘うかよ？」

「アハハ、それもそうか？小晴ちゃん大失敗♪…言いたくないな
ら言わなくてもいいからね。」

小晴先輩は突然真顔になった。

姉さんには聞きにくいことで、俺に聞けそうなこと。…あれか？
「本当の弟なの？今学校内で凄い噂になってるけど…。」
やっぱりそれだよな。

「DNA鑑定してもいい、真正正銘の実弟だよ。戦時中にアメリカ
にいたから戸籍に登録できなかったけどな。」

「そうなんだ…、でも似てないね。」

「俺は母親似、姉さんは父親似なんだよ。…戦争で写真がない上
に、今はどっちもあっちに行っちゃったけど。」

「そつか…。ゴメンゴメン、言い難いこと聞いちゃったね。お礼
に何でも教えてあげるよ！学内の恋愛からあの子のスリーサイズま
で何でも！！」

「へえ、姉さんのも知ってるのか？」

「もちろん！この前の旅行で調査済み、弟くんはお姉さんにも興
味があるのかな？」

「違うよ、単なる言葉の綾さ。興味はない。聞きたいこと…そう
だな…、姉さん学内ではどんな感じなのか教えてくれるか？“有名
”ってのは知ってるけど。」

「“有名”っていうことだけで奏子ちゃんを語るには少なすぎる
ね。ではでは私東小晴が奏子ちゃんを紹介しよう！！奏子ちゃんは
本当に凄いんだよ！！入学試験トップで華々しく神永学院に入学し
た後、今までテストは全て1位！！特に実技の点数は過去最高点！
！し・か・も、あの女子ですら嘆声を上げてしまうほどのモデル顔
負けの美貌とスタイルに、別け隔てなく謙虚に微笑む姿はまさに【
聖母^{マリア}】！！」

中学で【天使^{エンジェル}】と来て、今回は【聖母^{マリア}】か…。姉さんの二つ名が
また増えたな。

「しかもしかも！！ファンクラブは幾つもあったて、その規模はも

う計り切れない大きさになっているんだ…。」

「こいつはまた大変なことになりそうだな…。」

「大変なこと?」

「中学の頃似たような組織があつて、よく俺追われていたんだよ。その組織から。弟として相応しくないってさ。」

「ふむふむ、もちろん物知りのワタシく東小晴は知っているぞ！
！だけどその心配はないよ。」

「ん?なんで?」

「今のファンクラブは奏子ちゃんを静かに暖かく見守る穏健派の《ガーデン》が主流で、奏子ちゃんに必要以上に接触しないという考えが多いの。だから悠斗くんにはファンクラブから嫌がらせとかは余りないと思うな。彼らだって奏子ちゃんには嫌われたくないだろうしね。」

「なるほど。」

こいつは楽な学校生活を送れそうだな。

「…おっと、噂をすればだね。」

「???あ、小晴に悠斗っ!!」

小晴先輩が笑みを向けた先には朝通学路で別れたばかりの姉さんがいた。姉さんは数人の生徒に支持を出しデータチップらしき物を渡すと、小走りにこちらへ向かってきた。

「姉さ—??。」

その時。

その時、けたたましい音が鳴り、教室から姉さんに向かって大きな氷の槍が迫っていた。

「????奏子ちゃんっ!!」

????クソっ!!静かにするつもりがっ!!

俺は刹那の時間で体内のエネルギー量子を活性化させ、床を凹ませるほどの踏み込みで姉さんに近づくと、量子で一時的に右手の皮膚を硬化させ、氷の槍を殴り粉々にした。ふと教室を見ると、今度は火の玉が迫っていたので俺は姉さんを小晴先輩の方へ投げ、《飛行》を発動させ体勢を整える。そして蹴って火の玉の軌道を変える。火の玉はガラスを割り外へと飛び出し、爆発した。蹴りながら何が起きているのか確認した俺は、教室で暴れている二人の男子生徒を沈黙させるために《飛行》しながら二人に接近する。

「オメエー???!!」「この野郎???!!」

（こいつらをほったらかしにするとただ被害を大きくするだけだ!!鎮圧するしかねえ!!）

胸ぐらを掴み合って、能力を暴発させている二人に躊躇いもなく俺は近づく。その時俺の顔の真横を氷の塊やら火の玉が通りすぎるが、遅すぎるので避ける。

まず火炎系能力者が手前にいるので、後ろから顎付近を蹴り飛ばし、壁に激突し沈黙させる。まあ、能力者の体は頑丈だから大丈夫だろう。次に蹴りながら氷結系能力者に近づいた俺は、体を回転に逆らわず顎を拳で打ちぬき、気絶させる。

数秒で制圧が完了した俺は《飛行》を停止させ、静かに着地する。

「???風紀委員だ!!全員大人くしろ!!」

その時ようやく風紀委員が到着した。治安維持部隊が遅いのはどこもそうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0158t/>

英雄に安寧の日々はない

2011年9月8日12時19分発行